

「神の国を求めて」

「み国がきますように」と主イエスさまが教えてくださいました。主の祈りを私たちは日々祈ります。世界の聖公会（アングリカンコミュニケーション）ではカンタベリー大主教の呼びかけで「み国が来ますように」キャンペーンが行われ、日本聖公会でも今年も祈りのしおりが作成され、昇天日から聖霊降臨日までの10日間を過ごしました。主の弟子たちはイエス様が天に昇った後、一つの場所に集まって約束された聖霊の降臨を求めて、そしてみ国の到来を待ち望みつつ祈り続けました。私たちも日々み国の到来を待ち望みつつ毎日を生きて参りたいと思います。

そして、もう一つ覚えなければならないことは主イエス様はみ国の到来の時にもう一度この世に来られると約束されたので、イエス様は今私たちと共にいないのではないかと考えてしまいますが、そうではありません。イエス様は天に昇られるときに「私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」と言われました。これは大事なメッセージです。イエス様は「今」生きておられるのです。私たちの今日の出来事の中に生きておられるのです。ルカによる福音書12章22節～34節の聖書の小見出しは「思い煩うな」です。私たちは明日の事、将来に対する不安をいつも抱えています。でもイエス様は「あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである」（ルカ12:30）と言われました。これは、私たちが日々明日はどうやって生きていこうかと思いついて悩んでいることは重々分かって下さっているという事だと思えます。私の黙想ですが「あなたが日々悩んでいるのは分かっているよ。しんどいね。少しでも平安があるようにと私はあなたのために祈ってるよ。だから、明日の事は心配し

なくて良いからみ国の到来を信じて今日を生きましょ。そしてみ国のしるしはあなたの「今」にあるのですよ」と主は呼びかけてくださっているのではないかと思います。5月12日～14日にかけて北海道教区と東北教区の合同教役者会が行われ、皆で東日本大震災の被災地である磯山聖ヨハネ教会を訪ねる機会が与えられました。そこで、一人の信徒の方が迎えてくださいました。あの震災で傷つき解体された礼拝堂を再建する時にご自身は将来の事を考えた時になかなか再建に向けて一歩を踏み出すことが出来なかった。そんな時に当時の教区主教であった加藤博道主教が5年後の事よりも今を生きましょというメッセージを頂き、「明日の事まで思い煩うな」という聖書のみ言葉が脳裏に浮かんだそうです。そして、礼拝堂を再建しようという思いに至ったとのお話を伺いました。私たちは教会の将来の展望、また各々の将来を思うときに様々な不安があつてなかなか希望を見いだせないことが正直にあると思えます。でも天の神さまはそれらの私たちの不安を受け止めてくださっているのです。これは本当に大きな慰めと励まし、そして生きる力になると思えます。「わたし」の今の気持ちをすべて受け止めてくださっているお方が確かに今生きておられるのです。その証拠は私たちそれぞれの今という現場にあります。み国がきますようにと日々祈りながら、「今」出来る事を行っていきましょう。その積み重ねが今後の展望につながっていくのだと思えます。私たち一人一人の今が豊かに祝福されますように。そして主を信じる群れ（教会）が成長していきますようにとお祈りいたします。

（司祭 越山哲也）